

福井県立武生高校

チームで挑む授業改善

教科指導力の向上を目指した 自主研修活動で、公開授業と 教科横断型授業の文化を醸成

変革のステップ

背景と課題

- 大学入試改革や新学習指導要領の実施などの環境変化を前に、生徒が自ら考え、協働する授業への転換が必要だった

実践内容

- **授業改善プロジェクトチーム（以下、PT）を結成**
アクティブ・ラーニング（以下、AL）やICT活用、教科横断型授業などの研究を行う自主研修の組織を、ボトムアップで立ち上げた
- **公開授業と自主研修を定期的実施**
日常的に授業を公開し、月1回のPT会議で公開授業の報告と自主研修を実施。その活動をまとめて職員会議で報告し、「武高アクティブニュース」としても発信
- **教科横断型のコラボ授業を実践**
物理と世界史、化学と美術、国語と家庭科など、多様な教科・科目間でコラボ授業を実施

成果と展望

- 教師間で指導方法の共有が進み、ALが浸透。生徒にも協働して学ぶ姿勢が定着した
- PTの教師が異動しても、PT発足時のような熱意を持って取り組みを継続させる工夫が課題

**若手教師のボトムアップで
授業改善の自主PTが始動**

毎年200人以上が国公立大学に合格する福井県立武生高校は、2017年度から、有志の教師による自主研修の組織「授業改善プロジェクトチーム（以下、PT）」を中心に、教科・科目や世代を超えて授業力向上を図っている。その背景には、大学入試改革や新学習指導要領の実施を控え、講義型授業から、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業へと転換しなければならないという思いがあった。

発起人は、同校卒業生の中堅教師2人。職員会議で自校の現状と、生徒の思考力や主体的に学習に取り組む力の弱さといった課題、社会で

PROFILE



福井県立武生尋常中学校として開校。2019年度から文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」3期目の指定を受ける。SDGsを主なテーマとした探究学習と海外研修を実施する探究進学科を20年度に設置した。

設立	1898（明治31）年
形態	全日制・定時制／普通科・理数科・探究進学科／共学
生徒数	1学年約300人（全日制）

2020年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大、福井県立大などに227人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ442人が合格。

住所 〒915-0085 福井県越前市八幡 1-25-15

電話 0778-22-0690

Web site <https://www.takefu-h.ed.jp>



川内邦央 教頭
かわうち・くにおう
教職歴36年。同校に赴任して2年目。「直接話す。自分から動く。大目に見る」

野村幸史 生徒指導部
のむら・こうじ
教職歴14年。同校に赴任して4年目。前PTリーダー。「嫌いな教科、数学」を、1年後には「楽しい教科、数学」に」

小原崇裕 SSH研究推進部
おはら・たかひろ
教職歴9年。同校に赴任して5年目。前PTリーダー。「教師自身が学ぶことを忘れず、何事も楽しみ、全力で取り組む」

杉坂卓哉 PTリーダー
すぎさか・たくや
教職歴9年。同校に赴任して3年目。生徒指導部。「謙虚に、素直に、丁寧」

今川大輔 PTリーダー
いまがわ・だいすけ
教職歴7年。同校に赴任して7年目。「授業でも、学校生活でも、生徒が楽しむためには、まず自分が楽しむ」

求められる資質・能力などを踏まえて、学校を挙げて授業改善に取り組む意義を説明した。以前から同校に存在した、若手教師が指導に関する情報交換をする「B活」を基に、世代を超えた15人によってPTが結成された。

PTは、校務分掌ではなく、あくまで現場の教師による自主組織だ。ここでは、進学実績を支えてきた教材研究や進路指導のノウハウを継承しつつ、同校が生徒に身につけさせたい資質・能力として掲げる「TKF（*）」（T＝思考力、

K＝知識、F＝情熱・行動）の育成に向けて、ALの視点を取り入れた授業やICT活用、教科横断型授業などの研究を行っている。創立メンバーの1人で前PTリーダーの小原崇裕先生は、PTを通じて自身の意識が変化したと語る。

「生徒が楽しみながら学力を高められる授業をしたいという思いから、PTに参加しました。PTの活動を通じて、これからの大学入試や社会では、思考力や表現力、協働性が求められるということを理解するにつれて、それらを高校時代に伸ばすことができる授業に変えなければいけないと、使命感を抱くようになっていきました」

現PTリーダーの今川大輔先生は、生徒の思考力に課題を感じてPTに参加した。

「数学は、条件から論理を組み立てて解答を導き出します。しかし、パターン化した解法を暗記すればよいと考えている生徒が少なからずおり、そうした生徒は少しでも条件が変わると解答できなくなることに課題を感じていました。PTを通じて授業改善によって、生徒が考える場面を増やしていくことができれば、そのような問題を解決することができ

るのではないかと期待しました」
PTリーダーは、若手教師の2人が担当。PT会議の実施連絡や研修内容の企画など、PTの運営を担う。また、リーダーから、企画内容の検討や校外への発信、講師の人選などの相談を受けるベテラン教師2人が顧問となった。

図1 PT（授業改善プロジェクトチーム）の主な活動

リーダー	若手教師2人が担当。PT会議の運営や研修の企画立案などを行う。年度ごとに交代。
メンバー	自由に公開授業やPT会議へ参加し、授業改善を図る。
公開授業	自身の指導に対してアドバイスがほしい教師が、日常の授業を公開。公開前日までに公開日時や授業のポイントなどを伝えるメールを全教師に送信。
PT会議	月1回、放課後に1時間実施。その月に行われた公開授業の振り返りと意見交換、ICT活用など特定のテーマでのワークショップ、講師を招いた研修などを実施。
職員会議での活動報告	PT会議で発表した教師のうち代表の1人が、職員会議でPTの活動を5分間で報告。
「武高アクティブニュース」の発行	PT会議で発表した教師のうち代表の1人が、PTの活動内容を伝える通信を作成。教師全員への配信に加え、同校のウェブサイトでも公開。

* 学校資料を基に編集部で作成。

指導案や1コマ通した見学を求めない、負担の少ない公開授業を実施

PTの主な活動は、①公開授業、②月1回のPT会議、③職員会議での活動報告、④活動内容をまとめた「武高アクティブニュース」の発行だ（図1）。

そのうちの公開授業は、授業を見学してほしい教師が日常的に行う。事前に指導案などの資料の作成・配布は求めず、授業者は、授業の日時や内容、見てほしいポイントなどを全教師にメールで伝える。19年度にPTリーダーを務めた野村幸史先生は、公開授業実施のハードルの

* 「Thinking Knowledge Forward&Frontier」の略称で、武生（TaKeFu）にちなんで「TKF」とした。

低さが、取り組みが定着したポイントだと語る。

「公開授業の意義を感じているものの、最初は自ら手を挙げる教師は多くなく、PTリーダが意欲のありそうな教師に声をかけて実施を促していました。本校の公開授業では、指導案などの作成を求めず、新しい活動を取り入れたタイミングや、ほかの教師からアドバイスがほしい時などに公開すればよいので、負担が少なく、実践的です。そうした点が浸透していくにつれて、公開授業の実施に自ら手を挙げる教師が増えていきました」

19年度は、「価格決定のメカニズムを2次関数で考える」(数学)、「喫煙者の雇用停止の是非」(公民)、「効果的なプレゼンテーションのため(レイアウト)」(美術)などの授業が公開された。物理担当の小原先生は、公開した思いを次のように語る。

「私が公開授業を行ったのは、自分が取り入れた新しい指導方法を他教科・科目の視点で見てもらい、意見やアドバイスをがほしいからです。授業について否定的な意見は言わないというルールがあるので、安心して授業を公開できます」

現PTリーダで地理歴史科担当の杉坂卓哉先生は、自身の授業改善について次のように語る。

「公開授業やPT会議で刺激を受け、私も授業で答えが1つではない問いを生徒に投げかけたり、生徒同士のグループワークを増やしたりしました。すると、クラスの雰囲気や

生徒の人間関係にまで変化がありました。生徒たちが仲間の声に耳を傾け、自分の思いを言葉にするようになった姿を見て、もっとPTを生かして指導力を高めていきたいと思うようになりました」

参加自由のPT会議 職員会議や通信で内容を共有

一定例のPT会議では、その月に公開授業を行った教師が、授業内容やそのねらい、手応え、生徒の様子などを振り返る実践報告を行う。続いて、教科横断型授業やICT活用などをテーマとしたワークショップ、校内外の教師を講師として招いた研修なども実施する。会議は原則月1回で、定期考査終了後の午後

など、部活動の顧問の教師も参加しやすいタイミングで約1時間行われる。参加は自由で、関心のあるテーマの時だけ参加する教師もいる。

20年9月に実施したPT会議では、学習評価をテーマとし

て、「生徒がつくる評価基準」についての研究発表をし、ゲストで参加した他校の教師とも意見交換を行った。川内邦央(くわい くにづな)教頭は、PT会議の意義を次のように語る。

「関心のある研修にだけ参加できる負担感の少なさが、先生方を引きつけるのでしよう。私は参加しても、極力発言をせず、聞き役でいるよう努めています。議論の方向性を変えたり、話をまとめてしまったりすれば、先生方の自主性が損なわれます。PT会議は、先生方が参加を楽しみつつ、自らの成長を実感できる場であってほしいと思っています」

毎回のPT会議の結果は、その時の会議で授業や研修テーマについて発表した教師のうちの

図2

「武高アクティブニュース」



公開授業やPT会議などの内容を伝える通信を、PT会議でPTの活動を発表した教師のうちの1人が担当となり、月1回作成・発行している。全教師にメールで配信するほか、学校のウェブサイトでも公開している。
*学校資料を一部改訂して掲載。

1人が代表して職員会議で報告することで、全教師にPTの活動を共有、周知している。

「職員会議での報告は5分間以内に収まるようにしてもらっています。制限時間がある中で必要事項を伝えるスキルは、指導にも役立つはずですよ。また、発表にはプロジェクトを用いることにし、ICT活用のスキルを高める場にもなっています」（杉坂先生）さらに、PT会議でPTの活動を発表した教師のうちの1人が、活動内容を伝える通信「武高アクトイブニュース」（図2）の作成を担当。担当者は、ほかの発表者や公開授業を行った教師に原稿執筆を依頼するなどした上で、自身の視点で記事をまとめる。同通信はメールで配信するほか、学校のウェブサイトで一般公開もしている。

目指す資質・能力の育成に向け、教科横断型授業が活発に

公開授業やPT会議への参加がしやすい設計にしたことから、PTの活動には同校の9割以上の教師がかかわるようになった。

現在、公開授業は毎月3人以上の教師が実施し、19年度からは教科横断型のコラボ授業が度々公開されている。コラボ授業の実施は、「TKF」をより効果的に生徒に身につけさせることがねらいだ。例えば、物理担当の小原先生と世界史担当教師とのコラボ授業では、2時間連続でローマの水道橋をテーマに探究学習を実施した。1時間目の世界史では、水道橋にアーチ

構造が用いられた理由をグループで考えさせ、2時間目の物理では、建築様式による構造の違いを調べた上で、グループで話し合いながらブロックを利用した丈夫な橋を作成し、アーチ構造の強度の物理的な解析などを行った（写真）。20年度に探究進学科が新設されてからは、コラボ授業の実施がさらに増えている。

「PTの活動によって、教科・科目間の意思疎通を図りやすくなったことが、コラボ授業の活発化につながっています。授業づくりでは、各教科・科目の立場から、授業で生徒に身につけさせたい力を語り合い、どのように教科・科目間で協力するかを練っています。多様な視点から物事を捉えることで、生徒の科学的思考力や問題発見力の伸びを期待しています。また、教師が協働する姿は、生徒にもよい刺激になるでしょう」（小原先生）



写真 2年生の文系クラスでは、ローマの水道橋に用いられたアーチ構造をテーマに、物理と世界史の教科横断型のコラボ授業が行われた。文系クラスには物理が苦手な生徒が少なくないため、教師の想定外の答えも出てきたが、建築史を物理の視点から学ぶ文理融合の学習となった。

PTの活動を校外にも公開 授業改善の波が他校へ波及

PT発足から4年目となり、校内に自主的な授業改善の文化が根づいてきた。1年次から多くの教科・科目でALの視点を取り入れた授業が行われるようになり、教師が特にルールを教えたり、場づくりを工夫したりしなくても、生徒には他者と協働して学ぶ姿勢が定着している。全校体制でALに取り組んだことによる相乗効果の表れと言えよう。

毎年11月には校外向けに公開授業を実施しており、19年度は県内外から約150人が参加。参加者と同校の教師が熱い議論を交わした（20年度は、PT会議のみ公開予定）。同校を訪れた他校の教師の中には、PTを参考に授業改善の組織づくりに取り組む者もいたという。

今後の課題は、教師が異動により入れ替わってもPTを文化として継承していくことだ。

「PTが全校的な取り組みとなったのは、発足に尽力した教師の熱意があったからこそです。無理のない範囲でありつつも、PTへの参加を促して取り組みの効果を実感してもらい、成果を学校内外に発信してきました。しかし、各教師が意義を理解していなければ、取り組みは形骸化していくでしょう。異動により教師の顔ぶれが変わったとしても、指導力向上の活動を継続させていくための工夫を考えていきたいと思えます」（今川先生）